

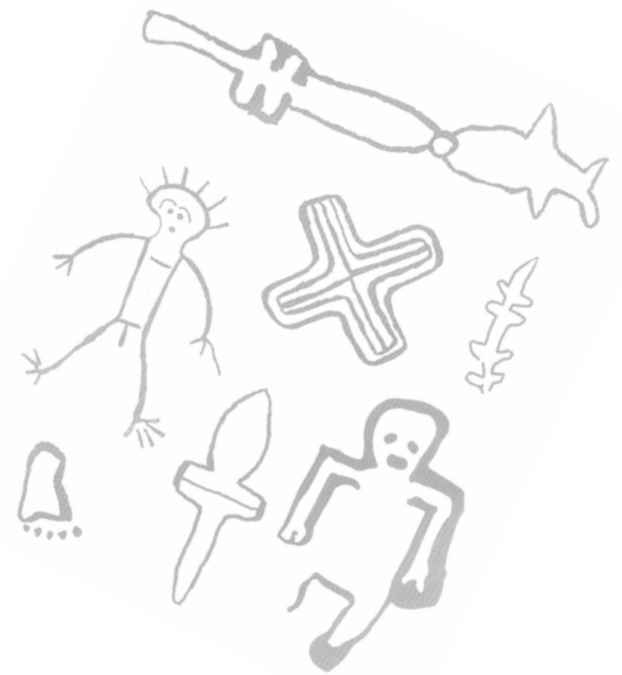


ミクロネシア連邦：ナン・マドール遺跡

ミクロネシア連邦ポンペイ島にあるナン・マドール遺跡は、巨大な玄武岩石材で構築された大小95の人工島によって成り立つ巨石文化の遺跡です。海に人工島が浮かぶその姿は時に「太平洋のベニス」とも形容され、その不思議な光景は時に「ムー大陸の遺跡」と呼ばれることもあります。これまでの考古学的調査により、西暦500年頃に人工島の建造が開始され、1000から1200年頃のシャウテレウル王朝の時期に最盛期を迎えたと考えられています。人工島を構成する玄武岩は、最も大きなもので推算90トンにおよびますが、これら石材が切り出されたのは遺跡から少なくとも10数km離れた島の反対側と考えられており、どうやってここまで運び、どうやって積み上げたのかについては、まだほとんどわかっていません。

ミクロネシア連邦をはじめとするオセアニア地域は、地球の表面積のおよそ1/3を占めるほどの広大な地域であるにもかかわらず、ユネスコ世界遺産に登録されている遺跡はイースター島（ラパヌイ）の人面石など数えるほどしかありません。ミクロネシア連邦は長年、このナン・マドール遺跡の世界遺産登録を希望していましたが、このたびユネスコの要請により、文化遺産国際協力コンソーシアム（事務局：東京文化財研究所）が調査団を組織し、2011年2月に現地調査を実施しました。奈良文化財研究所からも研究員1名が参加し、遺跡の保存状況のモニタリング、現地の遺跡保護体制の調査、現地住民へのヒアリングなどを実施し、日本による国際協力の可能性を探るための調査をおこないました。

（企画調整部 石村 智）



海に浮かぶ古代都市



人工島の間をめぐる水路

それぞれの人工島の間には水路が網の目のように張り巡らされており、引き潮の時には歩いて渡ることもできますが、満ち潮になるとボートやカヌーで行き来することとなります。



ナンタワスの内部にある石室

95 ある人工島のそれぞれには名前がつけられており、伝承が残されています。最も大きな島「ナンタワス」は王墓で、二重の周壁の内部には柱状玄武岩で構築された石室があります。